槇島兩村落のそれを指してゐることを誤解されたのではなからうか。この祭禮が「宇治邊、下人祭之」とは、この日の記事にも記してゐるところで、この社が藤原氏惹いては平等院との關係を生じたのは、むしろ其後に屬すると思ふし、また嘗つて本社が平等院の「鎭守」であつた事は、寡聞にしてその證あるを知らない。

それはさてをき、本書收むる七篇の論稿は、何れも眞摯にして質實なる考察ならざるはなく、それ〴〵嘗つて研究雜誌に連載され、當時の學界を賑はせたものであるが、今また新なる大環の一鎖として組立てられたるを見れば、再び鮮かな印象を受けるのである。諸篇のうち「散所」の一篇は、藝能以外にも多くの課題を含むものとして、就中學界を啓發するものであらう。（A5版上製五一七頁、昭和十六年十一月發行、畝傍書房刊）（林屋辰三郎）

## 宋代茶法研究資料

佐伯富編

支那に於ける飲茶の風習は唐に至つて普及一般化し、その需要が頓に加增するに至つて、こゝに商品としての茶、課稅の對象としての茶が大いに注視される樣になつた。唐の德宗の時はじめて茶稅が設けられ、また文宗の時、王涯なるものが一時專賣制を布いたと言はれてゐる。この茶に對する課稅專賣を普通に「榷茶」と言ひ、その榷茶のためのあらゆる制度規則を「茶法」と言つてゐる樣である。この茶法は宋代に至つて整備されるが、これは宋が契丹西夏等との外戰のため、財政窮乏し、國防費の補充調達に惱んだ結果、茶・鹽の如き生活必需品を專賣制に附してその利を收めんとし綿密なる制度規則を設置した事による。しかし、どちらかと言へば鹽の專賣が國家財政上重要なる地位を占めたに對し、茶は國防上緊要なる意義をもつてゐた。國防上に於ける榷茶の利用は外民族の懷柔策、茶馬の交易、軍糧治邊入中等の問題に分つことが出來る。此等の諸問題を攻究する事は、外民族と宋との密接なる關係、更にこの不可分の關係より惹起せらるゝ諸種の社會問題の性質、支那四周の諸民族の民族的自覺、乃至近世以來次第に發展し來る商人の社會・政治上に於ける地位勢力等々、凡そ近世史に於ける重要なる諸問題を解明出來るのである。從來宋代の茶法に關しては加藤繁博士をはじめ田中忠夫氏、松井等氏、曾我部靜雄氏、佐伯富氏等の貴重な研究もなされてはゐるが、いづれも茶法の一部分的な研究若しくは茶法を中心とした社會上の一問題を捕捉したに止まり、茶法それ自身についてなほ今後大いに攻究を要する方面もあるのである。

かゝる際、佐伯富學士の宋代茶法研究資料の發刊を見たことは、單に茶法研究の前途に一大便益と恩惠とを與へると言ふに止まらず廣く一般宋代否近世の財政・社會・經濟の問題を專攻せる人々にとつてはこの上なきにして力强き、手引となるであらう。本書は同學士がさきに東方文化研究所々員たりしとき、昭和十年春以來二ヶ年餘を以つて資料の蒐集にあて更に略々同じ歲月を印刷校正に費し、文字通り心血をそゝいで成つた無慮千數百頁、四六

倍版の大册である。學士の蒐集整理せる宋代茶法資料は宋會要、續資治通鑑長編、建炎以來繫年要錄、宋史をはじめ宋代のありとあらゆる重要文獻を網羅し、さらに必要の際には元・明・清のそれにも及んで餘す所なく、之を項目別に分類、同種同類の資料は之を一纒めにし、その項目を年代順に配列し、加ふるに詳細なる內容目次を邦文で要約して卷頭に掲げた。この目次だけで優に三百頁を突破してをり、如何に本書がすぐれた史料集であるかが窺はれるのである。同種の資料の中、宋會要が最も重視され、之を劈頭に配置して、之に相應せる他書より抽出せる資料は、その史料價値の輕重に從つて順次排次すると言ふ形式が採られてゐる。また原文に於て誤りと見做される箇處、疑問視すべき箇處、又は文字の脫落ありと考へられる箇處は夫々、著者が括弧、又は疑問符を添加挿入して、解決を今後の研究に俟たうと言ふ。聞くところに依れば編者は最初訓點のみならず語句の註解をも附する計畫であつたらしくそれが實現の果さざりしを學士は大いに殘念がつてゐられるが、我々としてはこのまゝで充分結構であることと思ひ史料集としてこれ以上を求めることは餘りにも無理であり虫のいい註文でほないかと思ふ。すなはち目次を見て內容を察知出來るから、これだけで大へん便利であり、これが非常に貴重である。編者の苦心は察するに餘りがある。資料の解讀に當つて宮崎市定助教授の御指導を得るべく何十回となく足を運んだ同學士のある日の述懷に曰く「讀むことだけで精魂を盡した」と。實際集めることは同時に讀むことであり、宋會要の難解難讀の程度は少しく宋代研究を志す程の人達であればよく承知してゐるであらう。本書を單に宋代茶法の研究史料としてのみ利用するならばそれは利用するものゝ手落ちである。例へば地理の史料をも包含されてゐるし、また先きにものべた如く利用の仕方如何によつては宋代の社會・經濟の廣き領域に迄進みうるのである。

卷頭に恩師羽田亨博士の序文あり。その中に學士の勤勉と功績とを賞讃されてゐるが、實際私は本書が佐伯富學士の人格そのものゝ現れと言ふ樣な氣がしてならない。（昭和十六年十月東方文化研究所刊　定價拾八圓）（荒木敏一）

## 支那美術史

### 「支那地理歷史大系」第九編

わが國の美術史については、最近漸く著書も多く普及されつゝあることは慶ばしいが、支那美術については、未だ研究も少數の人々に限られ、甚だ淋しい狀態にある。しかし今後東洋が新になる爲には、當然東洋文化の一大精華とも稱すべき支那美術史の中に深く省みられる所がなくてはならない。本書は支那美術を

一、支那繪畫史　望月信成
二、支那彫刻史　水野清一
三、支那工藝史　長廣敏雄
四、支那建築史　村田治郎

の四部に分ち、而も此等を一册の書中に收めて一貫した基調の上